

もくじ

金子寿一氏撮影写真について 1P 河鍋暁斎《能楽図屏風》について 2P

足立の開発400周年！ 澁江領開発定書 3P

金子寿一氏撮影写真について

—昭和の花畑・足立の写真—



昭和20年代の綾瀬川と葛西船

足立史談

第585号

2016年11月15日

足立区教育委員会

足立史談編集局

足立区立郷土博物館内

〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(28-308)

■金子寿一氏と写真

巻頭の写真は、昭和二〇年代後半の綾瀬川である。川に浮かぶ船や、川岸の建物が水面に反射して見事な情景となっており、まるで浮世絵のような見事な構図だ。この写真は、金子寿一氏が撮影したものである。

当館では、夏に金子氏から写真の情報を提供を受け、足立区の昭和の風景を写す貴重な写真であることから調査を開始した。ここではその一部を紹介したい。なお、金子氏が撮影した写真の一部は、本年六月にいき出版が刊行した『写真アルバム 足立区の昭和』に収録されている。

金子氏は、花畑の内匠橋付近の呉服商金子屋の次男として昭和十一年に生まれた。金子氏は小学生の頃、カメラを趣味としていた店の番頭さんが使い古したカメラをもらい、写真が趣味になったという。

中学生になると本格的に写真に取り組み、レオタックスというコピーライカを購入した。レオタックスは、昭和一三年から昭和三四年まで葛飾区新宿にあったカメラメーカーである。その後は、オリンパスペンFT（昭和四一年発売）、オリンパスTRIP35（昭和四三年発売）、ペンタックスK2（昭和五十年発売）などを愛用し、現在も現役で撮影を続けている。

主に、風景写真や花の写真を撮影

し、その数は一万枚を超えているという。その中には、花畑周辺や足立区域の貴重な写真などが多く含まれている。

■昭和二〇年代の綾瀬川

さて、巻頭の写真は、綾瀬川を写したものである。川に浮かんでいる船は葛西舟や汚わい舟と呼ばれる舟で、下肥（人糞尿）を積んでいる。

江戸時代、江戸の住民が出した人糞尿は、足立をはじめとした周辺農村部へ輸送され、農作物の肥料となった。人糞尿はいい肥料になるので、農家の人はお金を払い購入していた。しかし、時代が変わって大正十年頃になると、都市住民の増加によって人糞尿が過剰になってくる。そのため、都市住民は農家にお金を払って人糞尿を回収してもらおうという逆転現象が起こる。そして、昭和九年には東京市による市営汲み取りが始まった。しかし、従来どおりの汲み取りも行われ続けた。

写真に写っている葛西舟は、一度に一三〇荷（肥桶二六〇個分）もの輸送ができたという。戦後になってもまだ下肥は重要な肥料であった。金子氏もこうした葛西舟をよく見たという。葛西舟の中には、狭いながらも居住空間があり、そこで寝ることもできた。こうした下肥を使った農業は、昭和三〇年代まで行われていたのである。

■昭和後半の写真

ここに掲げた写真は、昭和五〇年前後の花畑周辺の写真である。こうした昭和の風景写真は、意外と少ないもので、博物館でもあまり多くは収蔵していない。博物館では、今後金子氏の写真調査を続け、その一端を紹介していく予定である。

(専門員 佐藤貴浩)



昭和 49 年
昭和 57 年



内匠橋東交差点付近
南花畑三丁目交差点より西方面を見る



《能楽図屏風》左隻「悪太郎」(右)、「大黒連歌」(左)



《能楽図屏風》左隻「柿山伏」(右)、「金岡」(左)

史家、飯島虚心(一八四一〜一九〇一)の著した評伝『河鍋曉斎翁伝』に依拠しています。そしてこの中で、曉斎の二番目の妻について、八月十一日、妻お清死去。

「アラサーみゅーじあむ」

出展資料紹介

河鍋曉斎《能楽図屏風》について

小林

優

平成二八年十一月一日(火)より開催の開館三〇周年記念文化遺産調査企画展「アラサーみゅーじあむ」。今回はその出展資料の中から、近年足立とのつながりが見出された日本画家、河鍋曉斎の《能楽図屏風》と、足立の縁についてご紹介します。

■河鍋曉斎―幕末明治の鬼才画家―
幕末から明治にかけて活躍した浮世絵師・日本画家の河鍋曉斎(一八三一〜八九)は、近年最も再評価の進んだ画家の一人と言えます。

天保二(一八三一)年、古河藩士

河鍋記右衛門の次男、周三郎として生まれ、幼少より家族と江戸へ出て、浮世絵師の歌川国芳、駿河台狩野派の前村洞和と、その師匠の狩野洞白に師事しました。この後、洞郁陳之(とういくのりゆき)の号で狩野派絵師の仕事をつとめ、「狂斎(きやうさい)」と号して戯画の制作も行いましたが、明治三(一八七〇)年に描いた戯画が咎められ、捕縛されたことを機に号を「曉斎」と改め、以降、万博や内国勸業博覧会といった公的な場に作品を出展して、高い評価を得ました。また、鹿鳴館の設

計者であるイギリス人建築家ジョサイア・コンドルを弟子としたことをはじめ、当時来朝した多くの外国人たちと親しく交流したことで、広く欧米にもその名が知れ渡りました。没後は長く美術史上の埋れた巨匠となっていました。昭和五二(一九七七)年、曉斎の曾孫にあたる河鍋楠美氏が河鍋曉斎記念美術館を開設し、その活動の再検証と再評価が進められたことで、現在では当時を代表する日本画家として、再び注目を集めるに至っています。

■曉斎と足立の縁―妻・女登勢と大谷田成田講からの依頼―

近年、この曉斎と足立とを結びつける記録が幾つか見出されつつあります。現在明らかにされている曉斎の経歴は、その多くが明治期の美術

後 北豊島郡鹿浜村の農 榊原
氏の娘 登勢を娶る。

という記述が確認出来るのです。

暁齋は生涯で二度妻を亡くし、三度の結婚をしています。最初の妻は江戸琳派の絵師、鈴木其一の次女お清で、安政四(一八五七)年に結婚しましたが、虚心の記述通り、二年後の同六年八月に没しています。この後に暁齋に嫁いたのが、鹿浜村(現足立区鹿浜)の榊原登勢だったので、虚心はここで、鹿浜村を北豊島郡としています。これは隅田川を挟んで隣接する南足立郡鹿浜村・鹿浜新田地域を北豊島郡と誤解したものと考えられます。

経緯などは不詳ですが、登勢がお清没の翌年となる万延元(一八六〇)年の十月に没していることから、暁齋はお清の没後、比較的早く登勢を妻として迎えたと考えられます。その結婚生活は一年程度でしたが、その間に長男周三郎(後の日本画家暁雲)を儲けました。

また、暁齋の経歴の中で、明治一三(一八八〇)年に足立郡龜有大谷田村(現足立区大谷田)の成田講中からの依頼を受けて成田山への奉納絵馬《大森彦七鬼女と争うの図》を制作したということがあります。この絵馬は現在も成田山霊光館の所蔵として、成田山新勝寺平和大塔一階の霊光殿で常設展示され、千葉県

指定文化財に登録されています。

足利尊氏の下で楠正成を破る武功を立てた大森彦七が、現在の愛媛県伊予郡の矢取川で鬼女に襲われ、これを退散させるという『太平記』の記述を主題としており、『河鍋暁齋翁伝』によれば、制作に当たって暁齋は龜有大谷田地域の中田屋という酒店に逗留し、七か月の思索の末に描きあげたと言います。

こういった記録の他にも、暁齋には千住の商家から依頼を受けて制作した画の下絵が残るなど、足立の人々と親交を結んでいた痕跡が伺え、その交流を物語るように区内からも暁齋およびその娘の暁翠らの作品が確認されています。

■郷土博物館所蔵《能楽図屏風》

郷土博物館所蔵の《能楽図屏風》もまた、区内より発見され、当館へともたらされた資料の一つです。

縦一六二・〇cm、横一六六・〇cmの二曲屏風が対となった二曲一双の形態で、屏風全体で一つの絵を構築するのではなく、各扇に独立した図像を貼り付ける押絵貼の形式となっており、表題の通り能狂言を主題として、「悪太郎」、「大黒連歌」、「柿山伏」、「金岡」の四曲の能狂言画が貼り込められています。各図には「暁齋」の印が捺されていることから、暁齋が号を改める明治三年以降の作と見られます。本紙の周辺は銀箔貼

りで仕立てられていますが、この銀を基調とした屏風形式は、足立で確認される美術作品にしばしば見られる仕立てであり、この地域における一つの美的感覚、「趣味」とも言えるものの特徴を示していると見ることが出来ます。

本作の主題である能狂言というジャンルは、暁齋の画業において大きな位置を占めています。弟子のジョサイア・コンドルが暁齋の伝記や画法をまとめた『Paintings and studies by Kawanabe Kyosai』(明治四四年刊)によれば、暁齋は狩野洞白の門下であった十代はじめの頃から能狂言を好み、大蔵流狂言の大蔵弥太夫虎重に入門して、後には免状を与えられるまでになつていました。飯島虚心もまた『河鍋暁齋翁伝』中で、暁齋の湯島の自宅に能舞台があったことを記録しており、「能狂言の画は翁の最も得意とする所なり」と述べています。

このように、自身も演者だった暁齋にとって、能狂言は終生取り組むべき画題でした。錦絵や肉筆作品に描くのはもちろんのこと、能狂言画のみを収録した絵本も手がけており、その代表的な一冊、『能画図式』(河鍋暁齋記念美術館蔵)の中に、『能楽図屏風』にも描かれた「悪太郎」、「大黒連歌」、「柿山伏」、「金岡」の図を確認することが出来るのです。

『能画図式』は、蓬枢閣小林文七が版元となって暁齋の手で描かれたもので、乾坤二冊に八四曲の能狂言画が収録されています。この内、坤冊の三九図目に「悪太郎」が、五一図目に「柿山伏」が描かれており、小道具の配置や姿勢、衣装の紋様などに若干の差異はあるものの、選定されている場面や描写は《能楽図屏風》とほぼ同様となっています。また、「大黒連歌」、「金岡」は、『能画図式』坤冊の五六図目と六三図目に収録されており、『能画図式』で「金岡」のアド(脇役)である金岡の妻がこちらに背を向けて金岡の右下に描かれているのに対し、『能楽図屏風』ではこちらに顔を見せて金岡の右上に描かれているという違いはあるものの、やはりほぼ同じ図様であると云えます。なお、この『能画図式』の収録順から、『能楽図屏風』二隻の配置も自ずから明らかとなり、一扇目に「悪太郎」、二扇目に「柿山伏」が描かれている方が右隻、「大黒連歌」、「金岡」が左隻として配置されると考えられます。

『能画図式』は、題箋や奥付には「暁齋」の号が使用されているものの、見返しや袋には「狂齋」の号があり、理由は不詳ながら暁齋が号を改める明治三年以前の慶應三(一八六七)年に制作され出版しようとしたがそれが叶わず、明治に入ってから改め

て出版されたものと推測されています。一方、『能楽図屏風』は前述のように各図に捺された「暁斎」の印から明治三年以降の作であると見られ、これを鑑みれば、『能楽図屏風』は先例である『能画図式』の図様を踏襲する形で描かれ、屏風に仕立てられたものと考えることが出来るのです。

■おわりに―足立の日本画家たち―

この暁斎の例のように、近年、作品と共に足立との関係を物語る資料・情報が確認された画家の数は決して少なくありません。また近代以降、足立に多くの日本画家たちが暮らしていたことも確認されています。中川の長門町に暮らした鐮木清方の門弟、門井掬水については、『足立史談』第五六八号で既に触れられました。大正以降、随時刊行された『大日本画家名鑑』（大日本絵画講習会代理部刊行）を見れば、少なくとも昭和一二年段階で官展や院展への入選歴がある日本画家として、

- ・ 清水 清芳 (足立区)
 - ・ 池澤 青峰 (足立区千住大川町)
 - ・ 中谷 光燕 (足立区島根町)
 - ・ 佐藤 常春 (足立区千住仲町)
 - ・ 西垣 隆満 (足立区伊興町狭間)
 - ・ 土井 勝宣 (足立区千住龍田町)
 - ・ 橋本 秀洞 (足立区伊興町本町)
- といった名前が挙げられています。彼らの活躍は、主に中央画壇と

のやりとりの中にありましたが、その足跡を追うことで、近代足立の芸術文化の、新たな一面が見えてくる可能性があるので。

(郷土博物館 学芸員)

足立の開発四百年！
澁江領開発定書



元和 2 年辰 12 月 10 日 大谷田新田宛伊奈忠治開発定書

元和二年(一六一六)十二月十日、幕府の代官伊奈忠治が九通の開発定書を出しました。忠治が出した九通の開発定書のうち、三通は足立区域に関係したもので、大谷田新田・六木新田・千住榎戸新田に係るものです。いずれも「平内抱 名主百姓中」宛に出されています。当館で

は、大谷田新田に係る文書を複製し、第一展示室の冒頭「東郊農村の誕生」というコーナーで常設展示しています。つまり、当館で一番最初に展示されている資料ということになります。本年、当館は開館三〇周年を迎えますが、くしくもこの文書が出されてからちょうど四百年に当ります。そこで、あらためてこの文書について紹介します。

開発定書とは、当時、まだまだ湿地帯が多かった江戸周辺の土地を開発して新田を切り開くために出された文書です。

平内とは、北三谷新田の河合平内のことで、「抱」とは平内に属するものたちということになります。つまり、大谷田・六木・千住榎戸の三箇所は、河合平内支配下の人間たちによって開発されたのです。

冒頭には「澁江の内、大谷田新田を開くの事」とあります。ついで一条目には、「新しい田を開発した年は、年貢を免除することが書いてあります。二条目は畑を開発した場合は、二年間年貢を免除することあります。さらに三条目にも諸役不入とあり、本来かかるべき諸役(肉体労働など)を免除するとあります。こうした税の免除をすることで、新田開発を進めようとしたのです。

一方で、四条目は、領主と対立したために居場所がなくなって新田開

発に来たものを新田に置いてはならないとし、五条目では出身地不明のものを新田に置いてはならないと決めています。こうした一定の制限はあるものの、多くの人間を集めて新田を開発しました。

こうした幕府による新田開発の奨励があったため、足立区域の開発も進み、江戸東郊の農村地帯が誕生したのです。

皆様には、開館三〇周年に合わせて博物館にぜひお越しいただき、この記念すべき文書をあらためて御覧いただければ幸いです

開館三十周年記念文化遺産調査企画展

アラサーみゅーじあむモノがたり

前期:平成28年11月1日~12月4日

後期:平成29年1月5日~1月~29日

足立区立郷土博物館は、昭和61(1986)年11月1日の開館から今年で30周年を迎えます。この間、多くの区民、寄贈者、地元の研究者の皆様のご協力をいただきました。

本展覧会では、いくつかの貴重な収蔵品を特別公開します。